

寒川町立寒川東中学校

研究テーマ：安心して過ごせる学校を目指して

1 実践の目的

学校評価アンケートの結果や、生徒の学びや育ちの実態を見つめ直す中で、「安心して過ごせる学校環境」の重要性を改めて認識してきた。授業中に自分の意見を発言できること、間違いや失敗を受け入れる雰囲気があること、そして誰もが居心地よく過ごせる教室づくりは、生徒の学習意欲・人間関係・自己肯定感と深く関わっている。いわゆる心理的安全性の高い人間関係の形成や学校づくりは、いじめの予防や不登校の未然防止、学びの保障という観点からも重要な課題といえる。

そこで今年度は、生徒が不安や焦りを感じることなく、安心して授業に参加できる工夫として、「間違いや多様な意見を受け入れる風土の醸成」「発言の肯定的な受け止め方の工夫」「明確な説明・指示」「生徒の認知特性に配慮した構造的な授業づくり」などの視点を持ち、日常的な授業改善を通して、生徒が主体的に関わり合える学校づくりを目指すこととした。

生徒向けアンケートの結果では、学年が上がるにつれて平均値が低下する傾向が見られた。生徒が安心して発言したり、間違いを受け止めてもらえたりする実感が弱まっている可能性が示唆された。これを踏まえ、本校では心理的安全性を基盤とした授業・学級づくりを研究の中心に据え、教職員の関わり方や学習環境の在り方について学校全体で改善を進めることとした。

2 実践の内容

校内研究の一環として、横浜国立大学教育学部教授 有元典文 氏を講師に迎え、教員向けワークショップを実施した。本ワークショップでは、「出会う・かかわる・支え合える・羽ばたく」という視点のもと、教師自身が体験的な活動を通して、学び合いの在り方や人と人との関係性の重要性について考える機会をもった。意見交流の前に身体的なアクションを取り入れる活動や、立場を越えて対話する構成により、安心して意見を表出できる雰囲気が生まれ、教職員間の相互理解が深まった。これらの体験は、児童生徒が安心して学びに向かうための学級づくりや授業づくりを見直す契機となり、本校の校内研究テーマである「安心して過ごせる学校づくり」を、教職員自身の実感を伴って捉え直す有意義な機会となった。



有元典文教授による教員向けワークショップを受け、各学級において関わり合い活動を意識的に取り入れた授業実践が進められた。意見交換や話合いの場面では、互いの考えを否定せずに受け止める姿勢や、発言

のしやすさを高める工夫を重視し、安心して協働できる学習環境づくりに取り組んだ。

関わり合いを通して学びを深める経験は、生徒の主体性や自己有用感を高めるとともに、「安心して過ごせる学校」を実現するための基盤づくりにつながっている。

3 実践の成果と課題

【成果】

本研究を通して得られた最大の成果は、生徒の学びや行動を「個人の能力」だけではなく、「環境との関係性」として捉える視点が教職員間に共有されたことである。有元教授は、本校が掲げている学校教育目標にある言葉「躍動」の頭文字をとって「やめるのをやめる」「組み合わせを良くする」「どうしたらと考える」「動いてみる」という具体的な目標を教えて頂き、これにより、「なぜ動けないのか」「どうすれば動き出せるのか」を、指導や評価の工夫として具体的に検討する姿勢が定着しつつある。

授業場面では、発言や話し合いに参加する生徒がふえ、正解を求めるだけでなく、考えを試行錯誤しながら共有する姿が見られるようになった。間違いや失敗を取り上げて価値づける授業構成により、生徒が安心して挑戦する雰囲気が出てきている。

また、教職員自身が授業を振り返る際に「指示が適切だったか」だけでなく、「生徒がどう感じ、どう動いたか」という視点で語る機会が生まれたのも成果の一つである。理科の実験に対する検証を行う授業では、協働的な活動を通して生徒同士が自然に教え合い、考えを深める様子があった。

【課題】

一方で、いくつかの課題も明らかになった。一つ目は、研究の理念やキーワードは共有されつつあるものの、実践の深まりや質

には教職員間で差が見られる点である。環境づくりの重要性は理解されていても、具体的な授業設計や評価の工夫にまで十分落とし込めていない場面もある。

二つ目は、生徒の「躍動」をどのように捉え、評価するかについて、共通の視点がまだ十分に整理されていない点である。行動の変化や対話の質をどのように記録し、次の指導につなげるのかについては、今後さらに検討が必要である。

また、安心感を重視することで、課題設定が易しくなりすぎたり、思考の深まりに十分つながらなかつたりすることが懸念される。安心と挑戦のバランスをどのように取るかは、今後の大きな課題である。

さらに、校内研究の成果を日常の忙しさの中で継続・発展させていくための仕組みづくりも必要である。研究が一部の実践にとどまらず、学校文化として根付くよう、次年度は実践の具体化と共有の工夫が求められる。

4 今後の展開

本校の校内研究を通して、生徒の学びや行動は、個人の資質だけでなく、学習環境や教師の関わり方によって大きく左右されることが改めて明らかになった。

次年度は、本年度得られた「安心して挑戦できる環境づくり」という視点を基盤としつつ、思考を深め、対話を質的に高める授業づくりを一層進めていく必要がある。そのために、各教科の具体的な授業実践を継続的に共有し、授業改善の視点や評価の在り方について組織的に検討していく。

また、研究成果を学校文化として定着させるため、日常の授業や学級経営の中で意識的に振り返る場を設け、生徒の「躍動」を支える教育活動の充実を図っていきたい。